

令和元年6月13日現在

機関番号：34303

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K11882

研究課題名(和文) 地域の健康づくり活動と地域への愛着の循環的螺旋構造の探究

研究課題名(英文) A Cyclical and Spiral Structure of Health Promotion Activities and Community Attachment

研究代表者

滝澤 寛子 (TAKIZAWA, Hiroko)

京都学園大学・健康医療学部・准教授

研究者番号：80293819

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：自分や地域の健康づくり活動参加者が「地域への愛着」を形成するプロセスの地域性および世代による違いを検討した。ニュータウン地域と農村地域の地域性による違いでは、活動のきっかけや活動展開の循環プロセス、地域の環境と人間関係が影響しあう関係性に違いがみられた。地縁の有無が影響していると考えられた。世代による違いでは、壮年期は、活動への戸惑い・抵抗感を感じる特徴があった。健康づくりに活動に参加している壮年期世代の人数が非常に少なく、十分な検討ができていないのが課題である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

地域への愛着が健康づくりの推進要因となることが示唆されてきたが、その関係性やプロセスは明らかにされてこなかった。今回、ニュータウン地域と農村地域では、地域性の違いを反映し、活動のきっかけや活動展開の循環プロセスが変わること、地域への愛着を育む上で地域の環境と人間関係が影響しあう関係性の違いが明らかになった。社会が変容する中で、地域の特性に合わせた活動展開や、地域への愛着を育む活動を考えるヒントになるのではないかと考える

研究成果の概要(英文)： This study investigated regional and generational differences in the process by which participants in health promotion activities form attachments to their communities.

The regional differences between rural areas and new town areas have seen differences in the beginning of activity, the cyclical process of activities, and the relationship between the local environment and human relationships. It is thought that the presence or absence of territorial bonding is affecting such processes.

When generations were compared, the middle age period was characterized by feeling a sense of embarrassment and resistance to activity. The number of those in the middle age generation who participate in health promotion activities is quite low, and it was difficult to secure enough data. Many more subjects are required to examine the generalization of this result.

研究分野：公衆衛生看護学

キーワード：地域看護学 地域への愛着 健康づくり

1. 研究開始当初の背景

地域への愛着に関する研究は、哲学、地理学、社会学、建築学、文化人類学、心理学など多様な分野で行われてきた。近年になって、地域への愛着感が後期高齢女性の5年生存率を高めることや、主体的な健康づくり活動やまちづくり活動の推進要因となること¹⁾が示唆され、地域への愛着は、まちづくりや健康づくりにおいて重要な要因となりうる²⁾ことが示された。

一方で、地域への愛着という概念は、アメリカ社会の高い流動性と深く関わる問題意識を含んで発展した経緯をもち、日本ではあまり行われてこなかったこと、さらに、この概念には文化的な側面が含まれ文化的背景を鑑みた検討が必要であることが指摘されている³⁾。つまり、日本の文化・社会における「地域への愛着」とは何かを検討していくことから始める必要がある。しかしながら、この日本の文化・社会における「地域への愛着」の概念やその構成要素を記述する研究はほとんどなく、高橋⁴⁾が住民意識調査の知見から構成要件を論じているほか、大谷⁵⁾が「地域への愛着」として都市部の20~60代の男女20名への自由回答から34の項目を見いだしていることが散見されるくらいである。

そこで、筆者らは、先行研究⁶⁾において、日本の農村地域の向老期から前期高齢者世代を対象にインタビュー調査を行い、自分や地域の健康づくり活動参加者が地域への愛着を形成するプロセスを分析した。その結果、「地域への愛着」は、自分が住んでいる地域に【そこで暮らす生活】と、その地域に住む【人とのつながり】との相互作用によって育まれていく循環的な螺旋構造をもつプロセスを見いだした(図1)。同時に、地域への愛着形成にかかわる【そこで暮らす生活】【人とのつながり】には、農村地域の、定着性が高い特性や、共同活動が必要という地域特性が反映される可能性が明らかになった。地域性が異なる対象でも同様のプロセスが確認できるかどうか検討する必要がある。また【価値の見直し】や【「地域」「人」へつながる活動】は、年齢や人生の転換期を迎えることが反映されたと考えられた。生きてきた時代の影響を受けて、世代ごとに価値観が違うことが指摘されている。現在明らかにしているプロセスは、第二次世界大戦後から高度経済成長を支えた団塊世代(プレ・ポスト団塊世代を含む)を対象としている点で、その後の、社会への関心が低く醒めたような視点を持つ世代等において、同様のプロセスが見いだせるのかを検討する必要がある。なぜならば、今後、自分や地域の健康づくり活動を実践していく主体となる世代になるからである。

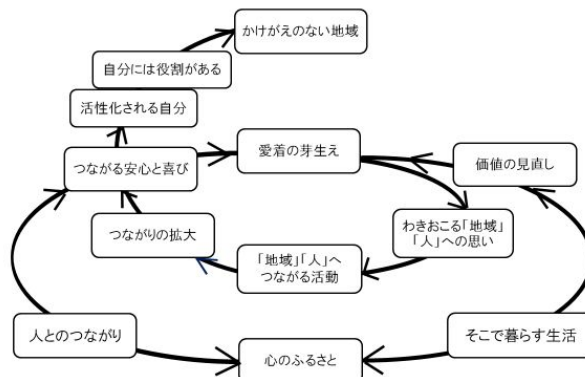


図1 健康づくり活動参加者が地域への愛着を形成するプロセス(農村地域)

2. 研究の目的

本研究の目的は、自分や地域の健康づくり活動への参加者が「地域への愛着」を形成するプロセスを明らかにすることである。具体的には、1) ニュータウン地域と農村地域の地域性による違いと、2) 向老期から老年期、および壮年期の世代による違いを検討した。

3. 研究の方法

(1) 用語の定義

ニュータウン地域

国土交通省 土地・建築産業局の定義を参考に「高度経済成長期の都市への人口集中に対して郊外に計画的に開発された地域」と定義し、具体的には、a) 昭和30年度以降に着手された事業、b) 計画戸数1,000戸以上又は計画人口3,000人以上の増加を計画した事業のうち、地区面積16ha以上であるもの、c) 郊外での開発事業の3つの条件を満たす住宅・宅地開発事業で開発された地域を設定した。

農村地域

農林水産省 食料・農業・農村基本問題調査会農村部門 や農村におけるソーシャル・キャピタル研究会 の定義を参考に、「農林業的な土地利用が大きな割合を占め、人口密度が低く、農林業を通じた豊かな二次的自然環境及び土地、水といった公共財的資源を有している地域」と定義し、具体的には、a) 農業振興地域の整備に関する法律における「農業振興地域」である、b) 国土審議会調査改革部会報告による「中枢・中核都市から1時間圏外の地方圏」に相当する、2つの条件を満たす地域を設定した。

向老期、老年期および壮年期

向老期を、ライフステージにおいて、身体能力の減退や地位・役割の変化に適応しながら老年期に備えて準備する時期として、55歳~64歳を設定した。さらに65歳以上を老年期とし、30歳~54歳を壮年期とした。

自分や地域の健康づくり活動

自分だけでなく地域の人々が、疾病やしょうがいの有無にかかわらず、その人らしく生きていくことができるように、住民自らがグループやネットワークを形成し自分の住む地域で展開

している活動とした。

地域への愛着

自分が住んでいる地域での生活や居住地域の人々との相互作用によって育まれていく「自分が住む地域への特別な思い」とした。

(2) 研究参加者および選定方法

研究参加者は、上記「ニュータウン地域」または「農村地域」の基準を満たす地域に在住し、自分や地域の健康づくり活動を展開しているグループに所属し、活動に参加している 30 歳以上の人とした。対象地域の市町村役場で住民の健康づくり活動を支援する担当職員に、選択基準に合致し、研究協力について研究者が説明する機会に同意した対象者を紹介してもらい、文書を用いて個人への説明と同意を得た。一部、スノーサンプリング法を用いた。

(3) データ収集方法

自分が住む地域への思い、および個人属性（年齢、居住歴、職業・職場、所属するグループの活動等）について、研究者が半構造化インタビューを行い聴き取った。インタビューは、研究参加者が希望する日時、場所で行った。インタビュー内容は、研究参加者に許可を得て IC レコーダーに録音した。

(4) データ分析方法

分析には、修正版グランデッド・セオリー・アプローチ を用いた。グランデッド・セオリー・アプローチは、研究対象となる現象を反映した質的データの解釈を積み上げることによって諸カテゴリーと諸カテゴリーの関係性を見出す方法で、修正版では、データを文脈のようなまとまりで理解する方法を採用しており、プロセス的特性を捉えるのに適していると考えた。

分析は以下の手順で進めるた。インタビュー内容を逐語録に起こす。逐語録から分析テーマ「活動を通じて地域への特別な思いを育むプロセス」に照らして重要と思われる具体例を抽出し定義を生成し、定義から概念名を生成する。類似例、対極例がないかデータに密着して検討する。生成過程の疑問や考察を理論メモとして記録し、データによって確認を行う。

このプロセスを繰り返して新しい概念を生成しつつ、一方で概念相互の関係性を検討する。

データと概念、概念同士、概念とカテゴリー間を継続的に比較し、カテゴリーを生成する。

最終的に、カテゴリーの関連をまとめて分析結果の全体（カテゴリーと概念の相互関係）を表す図を作成する。

(5) 倫理的配慮

研究参加者には、調査への協力依頼時に、調査の目的と方法、協力の任意性、同意撤回や不利益を受けない権利、匿名性の保持と個人情報取り扱い等について文書を用いて説明し同意を得た。なお、本研究は、各所属機関の倫理委員会の承認（京都大学 R0237, 京都学園大学 28-1）（慈恵医大 28-106（8349））を得て行った。

4. 研究成果

(1) ニュータウン地域と農村地域の地域性による違い

研究参加者

ニュータウン地域から 26 名の研究協力を得た。うち 2 名はニュータウン地域の定義から外れていたため分析から除外した。分析対象者は、男性 10 名、女性 14 名の計 24 名、年齢は 52 ~ 83 歳、中央値 72.5 歳で、壮年期 2 名、向老期 2 名、老年期 20 名であった。現住歴は 11 ~ 50 年、中央値 32.5 年であった。所属する健康づくり活動（重複あり）は、健康づくりの自主グループ 3 名、認知症サポーターキャラバン 1 名、地区社会福祉協議会または老人会の高齢者サロン活動グループ 23 名、お手伝い活動 1 名で、活動年月は 6 か月 ~ 34 年、中央値 14 年であった。

インタビューは、研究参加者が希望した場所で行い、自宅またはグループの活動拠点で、一人 40 ~ 100 分、中央値 60 分であった。

全体図

24 名の逐語録を分析データとし、分析テーマに沿って継続比較法を用いて、それらの概念間の関係性と類似性を検討した結果、39 の概念と 10 のカテゴリーを見出せた。以下、【 】はカテゴリー、< > は概念を示し、最終的に見出したプロセス（図 2）について説明する。

ニュータウン地域の健康づくり活動参加者は、計画的に開発された【お気に入りの住環境】があり、【地域との接点】となるタイミングを経て、自分や地域の健康づくり活動である【仲間との地域での活動】に結び付いていた。【活動で生き活きる自分】や【無理のないように続ける】ことで、【地域をみる視点の変化】が起き、【仲間との地域での活動】を継続し積み重ねていくことで（図では中央の循環を繰り返していくことが）、居住地域の人々との相互作用を高め、自分の居場所ができることで、「地域のため」と思って動いていたことが【自分のためだった】と気づき、自分と同じように年齢を重ねた地域との一体感を感じることで【大好きな地域】に

なる(図2)。

壮年期に該当する者が2名含まれていたが、概念レベルで「偉いとみられることへの抵抗感」がみられる違いがあったが、カテゴリーレベルでは【戸惑い・抵抗】に包含され、1つのプロセスに集約された。

ニュータウン地域の健康づくり活動参加者が地域への愛着を形成するプロセス(図2)と農村地域の健康づくり活動参加者が地域への愛着を形成するプロセス(図1)とを比較した。ニュータウン地域では、計画的に開発された住環境を自分が選択して転入してくる【お気に入りの住環境】が起点になっていたのに対し、農村地域は【そこで暮らす生活】の中に「厳しくても豊かな環境」があり、年齢を重ねると共に【価値の見直し】が起こり【愛着の芽生え】に結びついていた。また、ニュータウン地域では、【お気に入りの住環境】を起点に、その後、居住地域の人々との相互作用で【大好きな地域】になっていくのに対し、農村地域は【そこで暮らす生活】と【人とのつながり】との相互作用によって【愛着の芽生え】が生まれ、最終的に【かけがえのない地域】になっていった。農村地域では、定着性が高く、共同生活が必要という地域特性を反映した地縁があることが、環境と共に人との相互作用を生み地域への愛着を形成していくことが考えられた。一方、ニュータウン地域では、地縁がないからこそ、しがらみがなく、活動がしやすく、活躍する自分の足を引っ張られるようなことが起きて、また自分に合う活動の場を見つけることができるという特性が見出せた(図中、中央の循環の中の変化)。

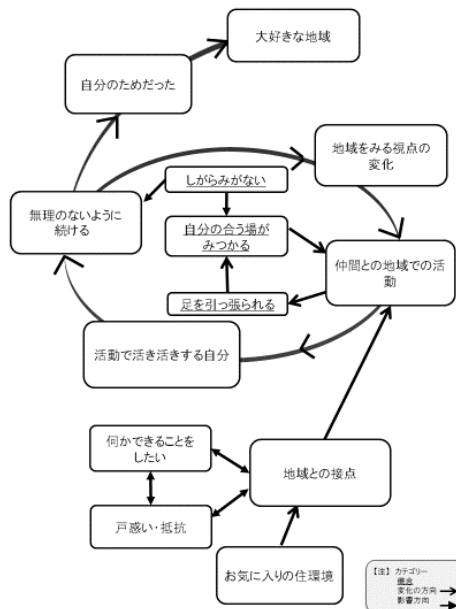


図2 健康づくり活動参加者が地域への愛着を形成するプロセス(ニュータウン地域)

図2 健康づくり活動参加者が地域への愛着を形成するプロセス(ニュータウン地域)

(2) 向老期から老年期、および壮年期の世代による違い

研究参加者

壮年期に該当する研究参加者は、ニュータウン地域で2名、農村地域で6名であった。男性1名、女性7名で、年齢は47~54歳、中央値51.0歳であった。現住歴は11~52年、中央値21.5年であった。所属する健康づくり活動は、健康推進員6名、地区社会福祉協議会の高齢者サロン活動グループ2名で、活動年月は2~20年、中央値9.5年であった。

インタビューは、研究参加者が希望した場所で行い、自宅またはグループの活動拠点で、一人40~90分、中央値50分であった。

壮年期世代の特性

8名の逐語録を分析データとし、分析テーマに沿って継続比較法を用いて、それらの概念間の関係性と類似性を検討した結果、38の概念を見出せた。

壮年期世代は、「身近な人からの誘い」や、「仕事を辞めたり子どもが大きくなったりの「タイミング」で健康づくり活動グループに入る点や、「活動で一步踏み出す躊躇」や「偉いとみられることへの抵抗感」といった活動への戸惑いや抵抗が見られる点が共通していた。

さらに、農村地域の壮年期世代では、時代の変化を感じ取っており、自分たちを「旧と新の世代の間」の存在として自覚し、地域独自の「行事や人づきあいの両義的解釈」を示すとともに、「活動のジレンマ」が語られる特性があった。向老期から老年期世代では、良さとして語られることが多かった、地域独自の行事や人づきあいについて、肯定的な側面と否定的な側面の両方の見解を語るとともに、「伝統食の継承」や、年齢を重ねたときに「地域に居場所があれば良いな」と願い、その役割を認識しながら活動を展開していく現実の難しさが「活動のジレンマ」として語られていたと考える。

自分や地域の健康づくり活動グループに所属している壮年期世代の人数が非常に少なく、十分な研究参加者を確保することができなかった。今回の分析で見いだせた壮年期の特性については、性別や健康づくりのグループが偏っており、さらにデータを追加し検証していくことが必要である。

<引用文献>

森田彩子, 高野健人, 中村桂子, 清野薫子. 地域に対する愛着が高齢者の5年生存率に及ぼす影響. 日本公衆衛生学会総会抄録集, 2009; 68: 239.

Brown, B., Perkins, D., Brown, G. Place attachment in a revitalizing neighborhood: Individual and block levels of analysis, Journal of Environmental Psychology, 2003; 23: 259-271.

鈴木春菜, 藤井聡. 地域愛着が地域への協力行動に及ぼす影響に関する研究. 土木計画学研究・論文集,

2008;25(2):357-362.

高橋香子, 末永カツ子, 栗本鮎美ほか. 住民の主體的な健康づくり活動の推進要件に関する検討. 東北
大医保健学科紀要, 2010;19(2):73 ~ 80.

園田美保. 住区への愛着に関する文献研究, 九州大学心理学研究, 3:187-196, 2002.

高橋準郎. コミュニティ・センチメントに関する一考察: 地域への愛着意識を中心に. 淑徳大学研究紀
要, 1982;16:45-63.

大谷華. 居住環境愛着の3成分構造と well-being との関連性 高齢者と就業成人の比較から, 立教
大学大学院文学研究科前期課程(心理学専攻)2000年度修士論文, 2001.

滝澤寛子, 櫻井尚子. 地方高齢者の健康づくり活動への参加を促す地域への愛着の概念分析と測定尺度
の開発, 2012 ~ 2014 年度 科学研究費助成事業 基盤研究(C) 課題番号: 24593438.

サントリー次世代研究所. 時代の変化と世代別価値観.

<http://www.suntory.co.jp/culture-sports/jisedai/active/theory/>

国土交通省 土地総合情報ライブラリー, 宅地供給・ニュータウン.

<http://tochi.mlit.go.jp/shoyuu-riyou/takuchikyokyu>

農林水産省 食料・農業・農村基本問題調査会 農村部門. 第2回資料:我が国における農村地域の位置
づけ, 1997. http://www.maff.go.jp/j/study/nouson_kihon/pdf/data_nouson2.pdf

農林水産省 農村振興局. 農村におけるソーシャル・キャピタル研究会: 農村のソーシャル・キャピタ
ル~豊かな人間関係の維持・再生に向けて~. 2007.

木下康仁. グラウンデッド・セオリー・アプローチ 質的実証研究の再生, 弘文堂, 1999.

木下康仁. グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践 質的研究への誘い, 弘文堂, 2003.

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計2件)

滝澤寛子, 櫻井尚子. 旧農村地域に住む向老期から前期高齢者の地域への愛着を測定する
尺度の開発. 社会医学研究, 査読有, Vol.35, No.1, 2018, pp.55-62

http://jssm.umin.jp/report/no35-1/35_1_07.pdf

滝澤寛子, 櫻井尚子, 渡部月子, 星旦二. 『地域への愛着』を測定する尺度の開発 - 都市
郊外のグループ活動に参加している高齢者における検討 -, 社会医学研究, 査読有, Vol.35,
No.1, 2018, pp.83-97

http://jssm.umin.jp/report/no35-1/35_1_10.pdf

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名: 櫻井 尚子

ローマ字氏名:(SAKURAI , naoko)

所属研究機関名: 東京慈恵会医科大学

部局名: 医学部

職名: 教授

研究者番号(8桁): 80256388

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。